
IF - アストライア学園の日常—

ウラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IF - アストライア学園の日常 -

【Nコード】

N6571Q

【作者名】

ウラン

【あらすじ】

終末戦争から、実に3000年の時が過ぎた。今、世界は魔物という驚異に晒され続けてい、たりなどしない。ここ、アストライア学園では、世の中の変人たち……個性的な人々があつまっている。そこでの日常の一幕マ。

（前書き）

こちらはリレー企画『輝ける星光』の関連作品、のパロディです。
今作の作者はウランです。

私の名前は……教えてあげない。

まあ、いくらなんでもかわいそうだから、あだ名くらいは教えてあげよう。

皆からは「ラグナ」って呼ばれてる。

アストライア学園に通う、花の女子高生だ。

そう、アストライア学園。

そこには様々な個性的な人々……変人が居座っている。

正直、超常識人な私にはハードな毎日だ。

……何？ その人を疑う目は？

まあいいさ、とにかく、ここではそんなアストライア学園での日常の、青春の1ページをお見せしよう。

さわやかな朝、日和見の頃合い。

私は登校中、軽く手を口に当ててあくびをする。

——すがすがしい朝だ。

こんな日は、気分が晴れやかになる。

今日はいいい日になりそうだ。

ふと、左を見る。

そこには、黒髪の男が電柱に向かって吐いている姿が……。

いや、すがすがしい朝だなあ。

でも、今日も嫌な予感がしてやまない、今日この頃。

「あつ、ラグナ、おはよう」

「……おはよう」

教室に入った私を出迎えたのは、蒼の髪に朱い瞳を持った美少女、ではなく男。

クラスメイトの霧川である。

「あ、寝癖がついてるよ。直してあげる」

「……ん」

霧川は女顔ではあるが、紳士なのだ。

「頭下げて」

言われた通りにすると、ジュボツ、という音が聞こえた。

気になって上を見ると、霧川がライターで火をつけていた。

「ちよつとまってるね。今寝癖を直すから」

ニカツ、とナチュラルな笑みを浮かべる霧川。

ちよ、ま、ど、どうやって？

突如、予鈴が鳴る。

「あ、席に着かなきゃ」

普段から真面目な彼は予鈴の時点で席について先生を待っているのだ。

——助かった。

時たまデンジャラスな霧川さんなのであった。

「今日の授業はこれで終わりだ。ちゃんとお家に帰って復讐しとけよ。俺のスーパーコンピュータにも劣らない頭脳と違って、お前らのちんまりした低脳じゃあすぐに忘れちゃうからな、ヒヤハハハッ」
ハウエンツァ先生の不快な授業も終わり、放課後である。

霧川は部活へ行った。

さて、家に帰ってもすることもないし、そこら辺をうろろろしてみようかな。

というわけで校舎裏である。

いや、なんとなくさ。

ふと、折れ曲がった背中を見つけた。

事務員のアウロ婆さんである。

歳にもまけず、よく働く霧川にも劣らぬ真面目な人だ。

どうやら、授業で使った備品をかたずけているらしい。

あれは確かハウエンツァ先生の科学の実験で使ったやつだ。

まあ、授業にかならず10分遅れてくる先生が真面目にかたずけをする姿など想像もできないが、いささか無責任ではないだろうか。しかし、それでもいやな顔一つせず仕事にこなすアウロ婆さんは凄い人格者である。

いやほんとうに、見習ってほしいよ、まったく。

思考をやめ、再びアウロ婆さんに目を戻す。

突然、アウロ婆さんの背中から黒い翼が片方だけ飛び出した。

「……………」

……全速力で逃げました。

あれは夢、うんそうだ夢だ。

だって、人間の背中からあんな悪魔的な翼が生えるわけないもの。絶対ない。

それに、私には前科がある。

いつの間にか眠っている件だ。

保険委員会の先輩の手作りお菓子をこ馳走になろうとした時とかによくあるのだ。

と、私が気を取り直していると、鶏の飼育小屋が目に入った。

そこにはフードを被った人物。

あれは確か、3年のスキンク先輩だ。

あ、ちなみに私は1年ね。

んでもって例の保険委員会の先輩は2年。

覚えておいてね。テストに出るから。

……冗談だよ。

と、私が馬鹿やっていると、スキンク先輩はおもむろに膨らんだ袋を取り出した。

嫌な感じにでこぼこしている。

封を開けると、中から無数のトカゲが――

「――っ」

またもや全力で逃げた私の耳には、スキンク先輩の妙な笑いごえが残っていたとき。

何だここは！？ まともな奴はいないのか！

傷心の私は、癒しを求めに家庭科室へと向かった。

家庭科室とはいっても、うちの学校に調理部なるものはない。

そのかわり、文芸部が活動の場としてつかっているのである。

私には、文芸部に友達がいる。

エレーナという、この学校で貴重なまともな女の子だ。

私は家庭科室のドアを開けた。

そこには、エレーナ一人だけがいた。

元々幽霊部員が大半の文芸部だから、しかたのないといえばそれまでだが、人みしりの私にとっては好都合である。

私はエレーナに声を掛けようとしたのだが――

「……やっぱりハウエンツァ×禾槻ですよねえ。攻めは勿論ハウエンツァ先生で、受けは禾槻君………はっ！ 攻めが禾槻君で、受けがハウエンツァ先生というのは………うふ、うふふ………」

私はドアをゆっくりと閉めた。

どうやら今日は文芸部の活動はなく、エレーナは既に帰っているらしい。

……私も帰ろうかな。

「のう、リリナよ」

「はい、いかがでしたか？」

校長室、と銘うつてある一室。

そこにはこのアストライア学園の校長と教頭がいた。

教頭は白い髪を首筋まで伸ばした、凛々しい顔付きの女性である。非常にクールで、感情表現が希薄、且つ無表情、というのがこの学校の先生生徒含めた意見だ。

校長は非常に可愛らしい顔立ちをしており、華奢で色が白く、一見すると女の子にしか見えない男。

これで三十路はとうに過ぎたというのだから、世の中わからない。

「……余らの扱いがひどくはないかの……」

「……いえ、他の方々と比べたらすこぶるマシではないかと」

「しかし、出番がこれだけとは……」

「校長と教頭など、学生生活の1コマにはいるのはせいぜい朝礼の時くらいです。出番があっただけ良かったと考えるのは不適切でしょうか？」

そんな、校長室でのお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6571q/>

IF - アストライア学園の日常—

2011年2月9日22時10分発行